



No.93 2009. 1
 (株)よかネット

----- も く じ -----

NETWORK

前原市の街なかを学生パワーで元気にしよう！ 2
 地域や商品の魅力をどう相手に伝えるか？
 ～平戸・松浦地区観光人材育成プロジェクト報告～ 3

見・聞・食

第2回観光勉強会「海外訪問客の観光行動や実態について」
 九州のインバウンドをどう捉えるべきか 4
 唐津街道「前原宿と宿場御前」体験ウォーキングツアー 5
 韓国旅行 百済の都「扶余」と韓定食の本場「全州」の旅 6
 宮若市の追い出し猫ものがたり
 表～ギョロリ、裏～ニッコリ 9

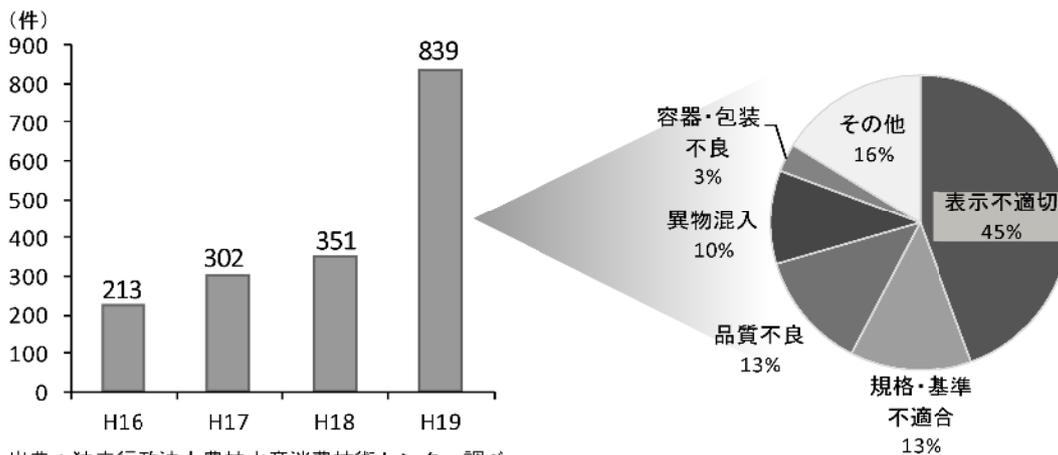
近況

北海道では、焼酎文化が伝わっていないのか？ 11
 「食」への関わり 11
 オチコボレの戯言・賢い人は読むな・その1 12
 糸島に移り住んで、5年になりました 17
 笑顔と+αの一言 17
 気になる王監督の一言 17
 ベロタクシーで博多情緒めぐり 17
 まさかまさかの 18

書評

われら雑草家族 19
 呉清源とその兄弟 19

○企業の「食の安全」への対応が求められている。



出典：独立行政法人農林水産消費技術センター調べ

近年、食の安全に関する様々な問題が発生し、その対応が求められている。

企業の食品自主回収件数は、平成18年の351件から平成19年にかけて倍以上に増加し、839件となっている。この理由について、同センターに聞くと、「平成19年1月、不二家の期限切れ原材料使用問題を機に食の安全への消費者の関心が高まり、企業内部で食の安全を見直す気運が広がった」とのことであった。平成19年の自主回収原因の内訳を見ると、「表示不適切」が45%となっており、この中には社会問題化した産地偽装などが含まれている。

また、839件のうち、菓子類が4分の1を占めている。菓子は2種類以上の原材料からなる複合原材料が使われることが多く、原材料にブラックボックスが生じやすいという点が原因として挙げられるようだ。

平成20年の自主回収件数も、平成19年とほぼ同じペースで推移しているとのことであり、この傾向は今年も続きそうである。

前原市の街なかを学生パワーで元気にしよう！

本田 正明

●前原市での大学連携の取り組み

昨年から私の住む前原市で、中心市街地を元気にするため、地元の飲食店、交通、不動産の事業者や主婦の人たち、九大の先生や学生、商工会や行政の人たちと一緒に、大学と連携したまちづくりを進めるお手伝いしています。去年は、地元の数多くある飲食店をもっと知ってもらおうと、「まえばるグルメMAP」をつくり、地元の祭りと合わせて宣伝を行いました。

学生さんたちにもっと前原市に来てもらおうというプロジェクトだったのですが、意外にも飲食店を訪れてくれたのは、駅裏の新興住宅地に住む地元の人や教職員の人たち。福岡市などから移り住んで来た人が多いため、地元の商店街のことなどはほとんど知らないようでした。

マップによって、地元で見落としていた新しい需要を喚起できたのは、思わぬ発見でしたが、メインの目的である大学や学生との連携は、地元のイベントに九大生に出店してもらうなどの取り組みがようやく動き始めた程度。伊都キャンパスの学生に行った前原市の認知度アンケートでは、6割の人が「前原市を知っていても利用したことがない」という状況をどうしたら動かせるだろうかと、地元の人たちと悩みました。議論を重ねるなかで、来ていない人よりも来たことがある人はどんな人だろうか、という話になり、もう一度アンケートを見直してみると、前原市に友人に会うために前原に来ていることがわかりました。

まずは、前原市に来てもらって、飲食店などの良さを知ってもらってから、住んでもらおうというのが、私たちの長期戦略だったのですが、「友

達が前原にいる」などの強力な目的がないと、学生はなかなか来てくれません。そこで、来年から伊都キャンパスに移る学生たちに目を付け、引っ越しの際に前原市を選択肢の候補に挙げてもらえるように、積極的にPRしていこうということになりました。

一度方向性が決まると、まちづくりに熱心な人たちの集まりなので、動きは速いものです。11月にある六本松キャンパスの九大祭（学園祭）に前原市ブースを出店しよう、前原市を宣伝するためのチラシをつくろう、チラシだけではインパクトがないから、糸島産の特産品などもいっしょに売り込もう、というようなことがあつという間に決まりました。

●六本松キャンパス最後の学園祭

11月22日六本松での九大祭初日。金曜日であることとあいにくの雨模様で、なかなか人が集まらない状況でしたが、それでも100個以上準備したコロッケが全部売れました。商工会から地元のパンやジャム、牛乳などの出品もあり、学生からは「本物の商品じゃん」などといわれたりもしましたが、なかなかの注目度でした。テントを覗いてくれた人に「前原市を知っていますか？」と声をかけたところ、認知度はたったの2割。前原市を知っている人はやはり友達の自宅などがある人ばかりでした。スタッフのおばちゃんたちがコロッケと前原のパンフレットを手渡ししながら、「前原市に遊びに来てね」と声をかけると、元気のよい返事してくれる学生さんたちが多かったのが印象的でした。2日目、3日目は、私は手伝いにいけなかったのですが、天気も回復し、一般の人出



前原の法被をきて宣伝をしました



コロッケと一緒に前原市のよさを売り込み中

もあったことから、豚汁やクラムチャウダーなどの日替わりメニューも大好評だったとのこと。スタッフの中には、まちづくりに興味を持った学生と連絡先の交換までしている人までいました。なかなか成果の見えにくい取り組みですが、地元の人と学生の接点が少しずつでも広がっているようで、よかったと思います。

●前原市への学生居住誘致とオリエンテーション

3月には、地元の不動産会社が集まった宅建協会と一緒に、九大生の前原市誘致キャンペーンを行うことになりました。宅建協会からは、前原の街なかへの学生誘致をがんばるので、前原市に住んだ学生さんたちが不満を持たないように、フォローをしてほしいという宿題をもらっています。移り住んだ学生さんたちが、楽しく前原ライフを行えるように、春には前原の街なかの使い方やつきあい方を学ぶオリエンテーションを開催しようと考えています。（ほんだ まさあき）

地域や商品の魅力を どう相手に伝えるか？

～平戸・松浦地区

観光人材育成プロジェクト報告～

雪丸 久徳

先号に掲載した平戸・松浦地区観光人材育成プロジェクトの「お客様を動かす『商品の表現術』」（講師：森吉弘氏、森ゼミ主宰、元NHKアナウンサー）が参加者からわかりやすく実践に活かせるとして好評であった。そのアンコール講座ということで、10月20日（木）、21日（金）に、長崎県の平戸市の大島と松浦市に行ってきた。

参加者は、農家、漁師、加工グループ、ホテル旅館関係者、ボランティアガイドなど、ものを作ったり、売ったり、まちを訪れた人に接する仕事をしたりしている人たち約50人。まちや商品の魅力を、訪れた方にどう伝えるか、好感が持たれる話し方、コミュニケーションをテーマに3つの話しがあった。

- 一、他己満足を理解すること
- 二、一人ひとりがマスメディアであること
- 三、こだわりを徹底的に理解すること

●コミュニケーションの基本は他己満足を理解すること

お店、ホテルなどを訪れた方を満足させるため



身振り手振りでポイントを伝える森さん

の言葉・話し方のポイントは下の通りであった。

- ・地元の言葉（あたたかさの伝わる方言）を使う
- ・固有名詞や数字をつかって具体的に相手がイメージできる言葉を使う。
- ・言霊。言葉に魂を込める。この思いだけは伝えたいという気持ちで話す。
- ・緩急大小、繰り返しなど、伝えたいことを強調する話し方。ベテランアナウンサーはあえて間違ったふりをして強調したりすることもある。
- ・説明の仕方はおもしろいところを一番先に話したほうが伝わる。
- ・具体的な場面、シーンで話す。
- ・あれもこれも言わない。

●一人ひとりがマスメディアであることを意識しよう

「初めて訪れた人は一瞬で様々な判断をつけるのでその一瞬に気をつけよう。一人の印象が、商品やまち全体の印象につながっている」ということで、言葉以外にも様々な情報を出しているの、そのチェックポイントと解説を頂いた。キーワードは以下の通りであった。

- ・顔の表情（一番多くの情報を出す）
- ・目の動き（目に自信が表れる）
- ・服装、所持品（交流が多い地域ほど気をつけている）
- ・髪型化粧（プロはスタイリストをつける）
- ・身振り手振り（オーバーアクションくらいがちょうどいい）
- ・声の調子、テンポ（ハリのある声でイキイキ）
- ・声の大きさ
- ・間の取り方（必死になるほど間がなくなる。間抜けは、しゃべり下手）

●こだわりを徹底的に理解しよう

相手が聞きたい、満足する内容を説明するには、徹底的した取材が必要であり、具体的に話すこと

がポイントであることも話して頂いた。

- ・そのもののルーツ（どこから伝わったか、品種くらいまでさかのぼって調べる）
- ・作り方（こだわって作ってます！では何も伝わらない…）
- ・地域性（自然が豊かな地域です！では何も伝わらない…）
- ・歴史（昔ながらの製法でつくってます！では何も伝わらない…）
- ・デザイン、演出
- ・知る人ぞ知る情報（五感で感じ取れるところを伝える）

市町村回っていると、売られている商品や街や看板などの売り言葉、キャッチコピーの共通点として、「これってどこでも使えるし、どの商品にでも言える」という言葉が多々使われている。万人に受け入れられる一般的なキャッチコピーとなっていて、いまいち使っている本人たちも、ピンとこないということが多いと察する。また、この商品のウリは？と聞いても、せっかくこだわってつくっていることや手間かけてやっていると伝わってこない回答が返ってくることのほうが多い。

地域や製品のオリジナリティ、魅力を地域外の人はどう伝えていくか、そんな悩み解決のきっかけになる講義であったと思う。

（ゆきまる ひさのり）

第2回観光勉強会

「海外訪問客の観光行動 や実態について」

九州のインバウンドをどう捉えるべきか

愛甲 美穂

10月31日に第2回観光勉強会を開催しました。九州産業大学商学部観光産業学科教授千相哲先生に「海外訪問客の観光行動や実態について～九州のインバウンドをどう捉えるべきか」のテーマでお話をいただきました。

●海外からの訪問客の推移

- ・外国人旅行者は伸びており、平成15年のビジットジャパンキャンペーン開始からみると全体で1.6倍、韓国、台湾1.8倍、中国は2倍となっており、特に北東アジアからの訪問客が多く増えている。

- ・宿泊客数は空（海）港の規模に比例しており、関東圏が突出している。訪問地別延べ宿泊数を国別にみると、アメリカは関東圏、台湾は北海道や北陸、韓国は九州への訪問が多い。
- ・1980年からの2008年の日韓観光交流人口をみると訪日韓国人(260万人)が訪韓日本人(223万人)を上回り、その数は逆転した。

●九州のインバウンド

- ・九州の外国人入国者は2007年は93万人。そのうちアジア地域が9割で、韓国人が6割、台湾1割、中国6.6%となっている。
- ・外航クルーズの九州入港実績をみると、長崎港、博多港、鹿児島港が主であるが、今後大分港、唐津港、宮崎港、また広島港も外航クルーズの誘致をしているので競争が激しくなっている。
- ・福岡は、2002年に高速船コピーが就航したこともあり数が伸びており、また受け皿として、中国のクレジットカードが使えるようになったり、船の中でビザの審査を終えるなどの体制ができてきた。

●観光にも求めることは国によって違う

- ・中国は関東でいえば東京ディズニーランドなど有名な観光地とショッピングで、いろんな人にお土産を買う。また、時間が無いので、お昼はデパートで弁当を食べるということもある。
- ・台湾人は個人旅行で旅行の質を求める。韓国人は1回目は旅行パッケージで有名観光地や福岡のお寺などを見て回っている。九州に訪れた人に購入したものを聞いたところ、化粧品や台所用用品などを購入していた。
- ・有名観光地を一通り楽しんだ韓国人の観光客は今後、グリーンツーリズムも視野に入れてくる可能性がある。日本的なものや体験を求めており、既に、韓国の会社が日本の空き家を借りて宿泊場所にしているような例もある。

●韓国人の旅行の情報源はブログ

- ・韓国人の人が旅行の情報源として活用しているのがインターネットのブログである。人気があるブログにはスポンサーがつく。
- ・例を挙げると、地下街の地図と各出口の先にある建物の写真が掲載されているページ。お薦めの店の紹介として入口付近の様子と入り口正面の写真的掲載。また、ラーメン店の利用の仕方として、入口→食券販売機→出てきた食券の様子→席の様子→商品がでてくるまで店に入ってからどのようにすればよいかステップごとに写

真が掲載されていることもある。

●今後の取り組み

・海外旅行には、不安・不便・不都合の3要素がある。不便・不都合な点として、通貨の使い勝手、観光情報、言葉、交通のわかりやすさの問題がある。特に、地図など番号使って記号化していく必要がある。また、外国人向けの観光案内は対象国の言語のみのマップでは、場所を尋ねたりした場合に日本人がわからないため、言語は並記する事が重要。また、屋台では席を詰め合うなど日本の習慣も伝えていく必要がある。短期的には、台湾や韓国からの客が多いだろうが、中長期的には中国からの来客も拡大していく。現在の課題を基に外国人に対応する受け入れ体制をつくっていく必要がある。

●ブログの丁寧な説明は「ウリ」の精神から

お話いただいた後、参加者はブログで細やかに旅先の情報を紹介する韓国の社会背景に注目が集まりました。千先生はその答えは「ウリ」という「私たち・仲間」という考えからですと説明されました。皆が情報を得る場所で嘘を言うなんて信じられないという考え方があるとのことでした。

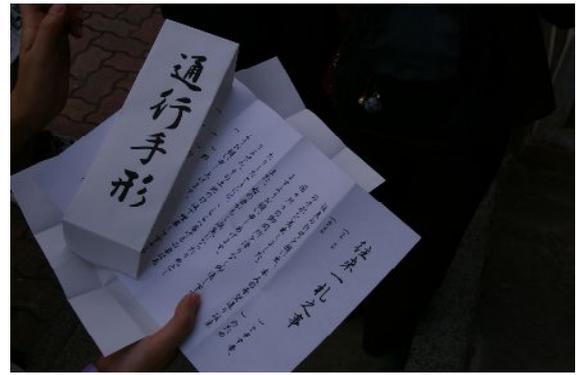
立地の近さに加え、交通、審査などの受け入れ体制の改善でアジアを中心とした外国からの観光が増加している九州。交通案内など細やかな体制から資源磨きまで、さらなる魅力アップは、住む私たちにとっても楽しみが増えます。個人的には、九州への来訪客が多い韓国に行ったことが無いので、ぜひ行ってその文化に触れてみたいと思った勉強会でした。 (あいこう みほ)

唐津街道「前原宿と宿場御前」 体験ウォーキングツアー

本田 正明

●「自分の住むまちって、昔どんなだったんだろう？」

地域づくりに関わっていると、ほとんど習慣のように地域の歴史や文化を調べるのだが、自分の住んでいる地域のことは、意外と知らなかったりする。地元のNPOで仲間になった有田さんは、前原の歴史に詳しく唐津街道の体験ウォーキングツアーもやっている人だ。ある会合の際に、ふと有田さんから「前原の街なかのまちづくりなら歴史も知っておいた方がいいですよ」とウォーキングの案内をいただいた。地元の歴史を知るいい機会



再現された通行手形



通行手形の説明をするガイドの有田さん

だと思ったのでさっそく申し込んで参加させていただいた。

朝10時に前原駅にいくと、観光協会の前に数人の人たちが集まっていた。年配の人が多く、夫婦で参加している人、女性2人組、男性一人に、我々夫婦を加えた7人が今回の参加者だった。話を聞くと福岡市の市報などでみて参加したそうだ。地元参加者は私たちだけだった。

さっそくガイドの有田さんが、前原駅周辺の歴史について解説してくれる。駅近くに前原本村という小さな村があったそうだが、1685年に唐津街道沿いに移動させられたのだそうだ。

歩く順序に沿って作られた地図と解説があるので、予習と復習もできる。コースは普通に歩けば30分くらいのものだが、説明や楽しめるポイントがいくつもあるので、2時間の間十分に楽しめた。印象に残ったポイントをいくつかを紹介したい。

<通行手形>

・書式も現代文で再現している。「右の者がもし病気になったり死亡したりしたときは、こちらへ届ける必要はありません。その土地の作法で埋葬して」といった記述が見られる。無縁仏の墓は、当時行き倒れとなった人たちも埋葬されていたのだそうだ。

<町屋の看板>

・建物と一体になった江戸時代の薬屋の看板。い



昔からつづく薬局屋



建物と一体となった昔の看板



文献をもとに再現された当時の料理

つも通っていたはずなのにまったく気がつかなかった。今でも薬屋さんが営まれていることに驚いた。

<町茶屋跡の陶器店>

・町屋なのに玄関と洋風の明かり窓がある建物。先々代が86歳から92歳にかけて作った家の模型の記念写真が残っていて、現在のご主人が、家が建てられるまでのエピソードを語ってくれた。

●最後は江戸時代の料理を再現した唐津街道御膳

2時間のウォーキングの最後は、豪商「綿屋」の建物を改装した「前原古在の森」というお店で、江戸時代の料理を再現した、唐津街道御膳をいただいた。福岡藩の藩主黒田長知一行が二日市宿に宿泊したときの献立をもとに、唐津街道に古くから伝わる料理を加えて制作したそう。江戸時代では、温かい食事は少なかったそうで、置合とい

われる卵料理以外は、冷たいものが並ぶ。ご飯は、鯛そばろと錦糸卵、椎茸、ごぼうなどがたっぷり入ったご飯にだし汁をかけて食べるもので、参加者の中には、宮崎の冷や汁にも似ているという人もいた。殿様気分にも浸ってもらうために、お膳も塗りの美しい高足膳を使っていた。このお膳が少ないので、参加人数を限っているのだそう。コース途中で自分の家の前を通過するくらい、身近なところを回ったのだが、知らないことばかりで、とても新鮮なことばかりだった。福岡から参加した人たちも満足していて、町茶屋跡の陶器店に戻って、買い物もしていた。地域の消費にも貢献するツアーになっているようだ。地元歴史の勉強ができ、まちづくりの可能性を考えさせられる有意義な体験だった。(ほんだ まさあき)

韓国旅行 百済の都「扶余」と
韓定食の本場「全州」の旅

山田 龍雄

私にとっては、釜山の鎮海湾の桜並木の見学以来、5年ぶりの韓国である。

我が社から歩いて3分ぐらいのところ釜山出身の女性、鄭（ジョン）さんが経営している韓国料理店「鄭家（ジョンカ）」という処がある。本場の韓国料理が味わえるのと韓国文化のことを聞くことができるので、たまにお邪魔するお店の一つである。鄭さんは、元々旅行インストラクターであり、なかなかの日本通でもある。この鄭さんから全州にて本場の韓定食が味わえることを聞いていたので、機会があれば、鄭さんに企画していただき、韓国の食をテーマとした韓国旅行にお供できればと思っていた。今回、鄭さんに企画を一任し、こちらは参加者（男性3名、女性5名）を募り、旅行が実現することとなった。鄭さんからの企画は、我々の最も関心のある「食」を中心とした企画であったが、出発の2週間前にぐらいに参加する男性人から、是非、百済の都「扶余」に行きたいとの要望があがった。私も白村江の戦の舞台、大宰府の土塁の原型がある「扶余」には是非行ってみたいと思っていたので、かなり無理して予定を変更していただいた。この男性人の我が儘と旅行日程も韓国のお盆である9月14日～15日を挟んでいたのも、韓国の新幹線のチケット手配など、鄭さんにはかなりご迷惑をかけてしまった。

●遠かった扶余、美味しかった冷麺

「扶余」までの行程は、下表のとおりである。朝7時に我が家を出てビートル、KTX（韓国新幹線）、バスを乗り継いで13時間も要した。憧れの「扶余」であったが、兎に角、遠いところであった。しかし、約1,300年前、よくもこの地に日本軍は百済救援のため、約4万人もの兵を送ったというのであるから、白村江の戦いが倭国にとつ



今回の韓国行程

《行程》

- 1日目 8:30: 博多港発（高速艇ビートル）
 11:25: 釜山着
 13:00: 高速鉄道KTXにて大田駅へ
 15:00: 大田駅着から扶余行きバスターミナルへ
 17:00: バスターミナルから扶余へ
 18:00: 扶余着
- 2日目 8:00: 出発（乗り合いタクシー）
 15:00頃まで扶余観光
 15:00: 定期バスで全州へ移動
 16:00: 全州着
 18:00: 韓定食
 20:00: 宿にてパンソリ鑑賞
- 3日目 7:00: 宿出発
 11:00: 釜山着
 ・食事、買い物
 14:30: 高速艇で帰る予定が高速艇故障のため、関釜フェリーへ乗り換え

て、如何に重要であったかを、この地を踏んで改めて感じた。

扶余に到着して、すぐにホテル近くの焼肉店で食事をした。鄭さんのテキパキした注文で次から次に肉が運ばれてきて、お腹が空いていたせいとか、焼肉をあつというまに平らげた。肉も美味かったが、最後の腹ごしらえといって注文した「冷麺」には感動した。日本で何度か食べた「冷麺」は、スープが薄く、味がもの足りなかったのであるが、ここのスープは、水キムチに牛肉の骨髄から搾り出されたエキスが含まれているそうで、なんともいえない深い味わいがあった。この冷麺に感動し、帰りは釜山の農協マーケットで冷麺（スープ付）を買い求め、日本に帰ってから調理してみたのであるが、袋裏に書かれた調理法はわからず、湯がきすぎてコシのない冷麺となってしまった。もう一度、本物の冷麺を味わいたいものだ。

●少々派手な全州の伝統家屋のまち並み整備

二日目は、午前中、扶余の山城跡、白村江の遊覧などを楽しみ、マイクロバスにて全州に移動。全州では韓国伝統家屋の民宿宿泊と聞いていたので、田舎の方に連れて行かれるのかと思っていたのだが、全くの勘違いであった。民宿は、市街地内に残っている伝統家屋区域内のメイン通りに面



左の建物が私たちが泊まった民宿



せせらぎのある歩道



夜間になると、枝状の照明が揺らめいている



先ずテーブルに並べられた14種類のキムチ、野菜料理



胡麻と炒った米粉とをブレンドしたスープ

した処にあった。このメイン通りは伝統的な韓国家屋と併せて道路も整備されており、かなり市としても観光客誘致のために力が入っている事業のように感じた。韓国の観光客もかなり来ており、最近の観光スポットになっているようだ。歩道にはせせらぎの流れも作り、歩道の一角には枝状の何本も揺れる照明があり、その枝の先端にダイオードで光っていた。日本のまち並み保存の整備に比べて少々は派手な印象を受けた。わが国のまち並み保存は、伝統家屋が建てられた時代を忠実に守ったまち並みの再現を行うので、近代的な韓国式街なみ保存のデザインは少し違和感が感じたが、これはこれで楽しい空間であった。

●感動の韓定食と生パンソリ

全州での夜の食事は、宿から10分ぐらい歩いたところにある伝統韓定食専門のレストランに案内された。先ず、テーブル一杯にいろいろな種類のキムチや野菜の炒めものが14種類ほど並べられた。これだけでも圧巻である。次にお腹を落ち着かせるために、スイカ入り野菜サラダ、胡麻スープを食した。この胡麻スープは、胡麻と炒った米とをブレンドしたものに水を加え、ゆっくりかき混ぜながら温めたものであり、とろみと胡麻の香りが絶妙で癖になりそうな味であった。釜山では、農協スーパーにて、いろんな穀物を粉にしてブレンドしてくれるコーナーで、この胡麻スープの素を作ってもらい、おみやげとした。このようにメインの料理を食する前にスープを飲むという形式は、長崎での卓袱料理と同じであると感じた。卓袱料理を食べるときにも、まず、お吸い物からいただかないといけない。仮にお吸い物より先にお酒を飲むようなことをしたら、仲居さんに品良くたしなめられる。

あとは野菜（カボチャ、レンコンなど）の両面に溶いた小麦粉を付けて焼いたチジミ風のもの、クラゲ料理、エビの蒸したのもの、三枚肉の胡麻の葉のキムチ巻き、蒸しカボチャ、タコキムチ、野菜や肉団子のおでん風煮込み、バラ肉（牛肉）の鍋、蒸したイシモチに辛めのスープをかけたものなど、10種類程度の料理が次から次へと運びこまれた。料理が運ばれるたびに鄭さんが、それぞれの料理について解説してくれる。今回の旅行参加者は、美味しさに加えて、韓国料理の知的サービスもうけ、大満足した。鄭さん曰く「韓定食は、まったく砂糖などは使っていない、野菜そのものが持つ甘さを引き出した味付けになっている」ということ。確かに日本の料理に比べて塩味は乏しく、辛いものは除いて非常にあっさりした味付けであった。この全州での韓定食はお酒を除いて一人前約5,000円であり、ソウルでは倍以上の値段で、全州ほど美味しくはないそうである。

満腹、満足の宴のあと、本日、宿泊する韓国伝統家屋の韓屋の宿に戻って中庭で休憩していると、チマ・チョゴリを着た宿の奥さんが韓国式の琴を抱えて縁側に座り、パンソリを演じてくれた。奥さんのパンソリの歌は、あのパンソリの旅芸人を描いた映画「風の丘を越えて」で聞いたのと同じように浪々とし、心に響くものであった。我々も、奥さんが歌うあとに続いて歌い、意味はわからな



骨付き牛肉の煮込み



牛肉のスープで肉だんごや野菜などを煮込んだもの、韓国名で“神仙炉”という



中庭の縁側でパンソリを演じてくださった宿の奥さん

いのであるが、パンソリ風の歌真似をすることで韓国の伝統文化を十二分に味わうことができた。

このパンソリに感動し、翌日の釜山での買い物は、糸乗さんと一緒にパンソリのCDを求めて街なかを20分ほどウロウロした。しかし、最近の韓国ではネット配信で好きな音楽をダウンロードするため、CD屋が少なくなっているとのこと。なかなかCD屋が見つからず、あきらめかけていたとき、露天の靴売りの人にメモ用紙を見せると、やっと小さなCD屋が近くにあることを教えてもらった。日本語が通じない高齢女性の店員さんに目と手振りでも、やっとパンソリCDを購入できた。

●なかなか快適な関釜フェリー体験

2泊3日の旅行でも、ハプニングが起きるものである。帰る予定の高速艇が故障し、なんと夜7時過ぎに出航する関釜フェリー（下関～釜山間のフェリー）への乗り換えとなった。フェリーへの乗り換えと聞いたときには、福岡に帰りつくのに時間もかかるため、嫌な気分のまま乗船すると、2段ベットの部屋が用意されていた。乗船客は少なく、フェリー内の風呂にもゆっくりに入ることができ、疲れていたせいか船の揺れも感じず、ぐっすりと眠り込んでしまった。6時前に目が覚め、デッキに出ると、チラチラと海面に浮かぶ下関らしき町の明かりが見え、あつという間のフェリーの旅であった。フェリーの旅が非常に快適にあることを発見した。今度の韓国旅行は、時間の無駄をなくす意味でも、行きは関釜フェリー、帰りは高速艇とすることも考えられると思った次第である。（やまだ たつお）

宮若市の追い出し猫ものがたり 表～ギョロリ、裏～ニッコリ

山田 龍雄

宮若市は、福岡市と北九州市の中央部に位置するまちだ。福岡方面から県道21号を通って行く場合は、久山町を通り、犬鳴峠を越え、約15分ほど車を走らせ、山を抜けると豊かな田園地帯が見え、“ほっ”とした気分になるところから宮若市が始まる。

●面と裏の顔がある「追い出し猫」

この宮若市に「追い出し猫」なる人形がある。それは『寺で悪さする大ネズミを寺の飼い猫が何百匹の猫を集め、大ネズミを退治し、寺から追い出した』という謂われをモチーフにして商品開発



災いを追い出し、福を招く猫人形。表ギョロリ目、裏ニッコリ目（追い出し猫パンフレットより）

されたものである。

この人形の特徴は、表はギョロリ目で箸を手に持った追い出し猫、裏はニッコリ目の手招き猫と、不運を退散させ、福を招くが表裏一体となった人形であり、デザインもなかなか可愛らしく、猫好きの人にとっては魅力的な商品ではないかと思う。猫の顔のデザインも8種類程度有り、バラエティに富んでいる。

キャラクターに物語性があるのが良く、実際にお寺が在ったと言われるところには猫塚が建っており、近くには追い出し猫をデザインしたバスの待合い所がある。はじめてバス停を見るとインパクトがあり、「何でこんなバス停がここにあるのか」と人に聞きたくなる。これがネライなのかも知らない。

この人形の開発は平成6年の「商工会むらおこし事業（県事業）」から始まり、約14年の歴史がある。この開発の歴史や最近の人気状況について「追い出し猫振興会」の事務局長にお聞きした。

●人形から始まり、今では多方面のグッズ展開

開発当初は、市内観光地や県内のふるさとフェアで、ほそぼそと販売していたが、平成9年に100名で300万円を出資し、支援組織「追い出し猫振興会」を立ち上げた。平成10年に催された「全国商工会連合会主催：ニッポン全国むらおこし展特産品コンテスト」で全国商工会連合会会長賞を受賞したことがきっかけとなり、販売に火が着いたようだ。そして、平成14年にはTシャツ、タオルなどの関連グッズ、追い出し猫せんべいなどのお菓子も商品開発し、平成20年には地域活性化等の調査研究事業（県事業）がきっかけでサンリオと提携し、携帯ストラップを開発し、今年の10月

追い出し猫の謂われ（パンフレットより）

400年以上も昔のこと、現在の宮若市猫塚というところにお寺があり、たいそうネコ好きな和尚さんが住んでいました。あるとき、そのお寺に一匹の大ねずみが住み着き、和尚さんを襲ったり、あたりを荒らし回ったり大暴れ。困り果てた和尚さんを見かねた飼いネコは、何百匹もの仲間のネコを集め、その大ねずみと長い時間死闘を演じました。翌朝、大ねずみは退治され、たくさんのネコも死んでしまいました。和尚さんは、ネコ達を哀れんで、猫塚を作って丁寧に供養しました。今でもこの地に猫塚が残っています。



猫塚の前に鎮座する「追い出し猫」のバス停



追い出し猫の型が、置かれている福祉作業所

末から販売している。このストラップは追い出し猫がキティちゃんのぬいぐるみを着ているような格好をしており、なかなか可愛らしい。値段も525円と手頃であり、若い女性に人気があり、半月で1,000個売れたそうだ。このキティちゃんとの追い出し猫のコラボが何故できたのかというと、この事業のアドバイザーとして、たまたまサンリオに係わったことのあるデザイナーが入っていたことから、話はスムーズにまとまり商品化になったという。

追い出し猫関連商品は、昨年まで600万円の売上げだったのだが、今年度は1千万円を目指しており、達成されれば3割近く伸びとなる。さらに効果的な営業と製造体制を組むと売上げは伸びるのではないかと思う。

●製造は障がい者の福祉作業所

この追い出し猫は、宮若市と北九州市の福祉作業所で作られている。宮若市で作っている追い出し猫（1個、600～7,000円）は、博多人形と同じように粘土を型にはめこみ、固めていく方法で作っているとこのことで、現地で見ると追い出し猫の型がいくつも置かれていた。この作業所で焼き、あとの絵付けは4～5人の主婦がしているとのこと。

●「追い出し猫」で市のイメージづくり

「追い出し猫振興会」では、今後「追い出し猫」をテーマとしたイメージづくりに取り組む予定である。

・ 追い出し猫をデザインしたマークの標識のバス停の設置によるイメージづくり。今年度から3ヶ年で14基程度設置する予定。

・ JR九州バスと提携し、バスと脇田温泉と追い出し猫の絵付けコース企画

宮若市の主要幹線を走っているJR九州バスと提携した事業であり、これによって市のイメージアップ、入り込み客増が期待される。

宮若市内には、「追い出し猫」以外に、「釘抜き地蔵」、「イボ抜き地蔵」など災いや悪いものを追い払うといったものがあるので、これをネタとしたイメージ戦略ができるのではないかと思っている。(やまだ たつお)

近 況

■北海道では、焼酎文化が伝わっていないのか？

昨年の11月の初旬、(NPO)都市計画家協会の全国大会が北海道恵庭市で開催された。この団体の福岡支部立ち上げのPRも兼ねて、当社より私と本田が参加した。

久しぶりの北海道ということもあり、毎年の「よかネットパーティ」には、参加はできず、北海道の美味しいものだけを送ってくださっている高橋君(北海道立寒冷地住宅都市研究所)に、是非会って、お礼をしなくてはと思っていた。

高橋君とは、約10年ぶりの再会であり、お互い確実に老けてしまったのであろうが、高橋君の毎年のお土産のせいか、すぐうち解けて、札幌すすき野近辺の居酒屋で飲むことになった。

私は、焼酎党なので、北海道に来ては焼酎を頼んだ。しかし、北海道の焼酎をみて、愕然としてしまった。九州人は、乙種の焼酎が基本であるわけだが、なんと甲種焼酎に「シソ」「ニンジン」「タマネギ」などのエキスを入れ込み、焼酎としているように思われる。これも焼酎といえば、焼酎ではあるが、乙種焼酎の味になじんでいる九州人の私にとっては、全く受け入れられないものである。

乙種焼酎は麴・水・酵母を加えて1週間ほど発酵させた1次仕込みに蒸した原料(芋、麦、米

等)を加え、さらに発酵、蒸留するから原料本来の味、香りが楽しめるのである。

北海道の焼酎メーカーは、何で後から香りづけをするような焼酎を造ろうと思ったのか不思議である。北海道の焼酎づくりのメーカーに『本来の乙種焼酎づくりの方法で焼酎を造ってください』と言いたい。ところ変われば品変わるのかなあ？

【甲種焼酎】

「連続式蒸留器」で蒸留され、アルコール度数36度未満のものを指す。連続して繰り返し蒸留されることによって、アルコール以外の成分、原料の風味や香りは取り除かれ、純度の高いアルコールが抽出される。そのため無味無臭の焼酎ができ、サワーや酌ハイに用いられるホワイトリカーとなる。

【乙種焼酎】

「単式蒸留器」で蒸留された、アルコール度数45度以下のものを指す。これは、一度しか蒸留を行わないために、原料の持つ風味や香りが色濃く残り、独特の味わいが残る焼酎のこと。

(山田 龍雄)

■「食」への関わり

最近の業務は、食に関するものが多い。水産物の販売戦略を始め、農産物、加工品のブランド化、農産物を使った料理の新しいレシピの開発等々。もちろん当社でレシピを開発したり、加工品を開発したりする訳ではない。餅は餅屋で、知り合いのプロ、専門家に開発の依頼をしている。

そういう仕事が多くなっていることもあるせいか、うちは何を専門にしている業者なのか、ということの時々聞かれる。聞かれると、前社長の糸乗がいつも言っていた言葉「電話帳」屋というのを思い出すが、電話帳からもう一歩先の組み立て屋の仕事が多くなっている。

もともと、紹介だけで仕事が終わるはずもなく、相手に伝え、人材を組み合わせ、チームを作るという組み立ての作業が重要である。

いろいろな部品、素材を生かし、活用して、顧客の満足度を高めるためには、調査も大事な整理作業だが、実業まで持って行くことが必要とされている。社内だけの人材で仕事が完結するということはほとんど無くなり、いろいろな人とチームを組むというのが最近の仕事のやり方になったし、そういう要求も多くなった。

とくに、食、食品、産品等がテーマの仕事の場合、知るほどに奥が深まっていくとを感じる。「食」は人類が生きていく糧でもあり、今年もいろんな「食」といい出合いをしたい。

(山辺 眞一)

■オチコボレの戯言・賢い人は読むな・その1

日本人“総員オチコボレ時代”を生きるキーワードは“オチコボレでも人もうけはできる、人もうけができたら食っていける”

【なぜ今オチコボレ論なのか——“平等幻想”からの脱却】

この頃、若い人の自暴自棄になった犯罪が非常に多い。仕事があまくいかない、周囲の人びとが自分をないがしろにしている、落ちこぼれているとみている、社会全体が自分を正当に評価してくれない、などといった不満があるようだ。この不満の裏には“平等幻想”があるように思う。

私たちの世代は、社会が平等だという前提を持っていなかった。私の体験でいうと、家庭教育とは、矛盾を頭にたたき込むことのようにであった。ちょっと思いだしても、次のような文句が浮かび、当時思った反発も思い出す。

- ・分をわきまえよ（世の中は平等ではない。おまえは低い方なのだ。もちろんこの家も）……ジャアナニモ、努力センデイイノカ
- ・言われたとおりにせよ（おまえはどうせ分らないのだから、とにかく親のいうとおりにせよ）……マチガッター、聞き違イモアルガイイノカ
- ・ヨコから口出しするな（おまえのいう程度のこととは分かっているのだ。いちいちいうと角が立つから、タイミングをみているのだ）……聞き違イヲ言ッテアゲヨウトオモタダケナニ
- ・口答えをするな（素直に聞け）……口答エデハナイ、意見ヲイッテイルノニ。ソレナラ今後一切返事モシナイゾ

とにかく、常に頭ごなしに言われて、言い分は聞いてもらえなかった。時々矛盾したこともあった。父親に誉められた記憶というものがない。この頃「子供は誉めて育てる」などということになっているようだが、こんな馬鹿なことはない。子供が「誉められよう」という気持ちになると、目上の人の気に入るように合わせよう、誰か上手な人の真似をしようという気になって、独創性が身に付かないことになる。社会のレギュラー一定員に潜り込めればいいが、落ちこぼれた途端に絶望に

向かう。

小学校4年の時だったと思うが、学校から帰ると、近くの畑で三畝分(50㎡ぐらいか?)の草取りをするのが、毎日のノルマになっていた。その日は調子がよかったので四畝分の草取りをした。そのことを母親に分かって誉めてもらいたくて「ああ、えらかった。四畝分草取りをした」といったら、「いちいち誉めてもらいたいなら、もう手伝いせんでいい」といわれてしまった。この時は、「母親は黙って朝から晩まで仕事をしているのに」と思い、少し反省をしたような気がする。

当時の私は、いちいち反発していたが、今考えてみると自我を養うために必要なことだったと思う。正直なところ「家の親は私を憎んでいるかも知れない。自分は、この家には要らない人間なのだ」などとふてくされたり絶望したりもしていた。自分がオチコボレの境遇にあると気づいて以来、「平等幻想」と無縁に育ててくれた親を、有り難く思うようになっている。

*「親が子を誉めるのは、わが死ぬ時だ」水車を修繕する大工の棟梁野瀬秀拓さん。テレビ「よみがえれ!!伝説の水車」テレビ朝日08/1123/23:00~23:30

【世の中は矛盾に満ちている——修業とは矛盾に耐えること】

今年の4月に立川談春(1966~)の「赤めだか」という本が出て、直ぐに読んだ。彼は極めつけのオチコボレで、高校を2年で中退してレギュラーコースから外れた。しかし今は、上層のピンに属するオチコボレである。

高校に入ると談志の追っかけをはじめ、落語家になろうと決心する。弟子入りするなら談志だと思った。談志師匠を訪ねると、「あと一年高校を卒業するまで通うのもヨシ、中退して弟子になる覚悟が出来たら親を連れて来なさい。親の許可なしで預かることは出来ん」という。まず、高校の担任に中退して落語家になると宣言。担任が「お母さんを連れてきなさい」というので、何も説明せずに母親を連れて学校に行った。

「17才で落語家になるという人生の決断をすることはなかなか出来ないことです。校長と相談して、我が校は本人の意志を尊重することにしました」「校長が一目お目にかかって祝い申し上げていっています」といわれる。嫌がる母親と校長室に行くと、校長が感激して、「名誉卒業生として、卒業証書は無理だが代わりに私が色紙を用意した。終業式に全校生徒に話してエールを送り

たい」といった。

帰って父親にいうと「お前の人生だから好きにすればいい。ただし高校だけは卒業しろ」というが「申し訳ないけど学校は辞める」といったら、「そうか上等だ。だが、ここは俺の家だ。俺がルールだ。勝手するなら出て行け。談志のことだ。弟子の面倒などみないだろう。お前は自分の住む家と、食う仕事見つけろ。今後俺の機嫌など取らなくていい」と突き放した。

「落語を聞くなら、談志は必ず聞いておけ」と教えてくれた親父が、何故そんなにまで談志を悪くいうのか、その時は分からなかった。意地になって家を出て、新聞販売店に住み込んだ。しかし本当は、弟子というのは内弟子になるということで、メシ付きだと思っていたのだ。

勇んで談志の家へ行くと「親はどうした」「反対しています」「俺は忙しいんだ。親を連れてくるというから時間作って待っていた。ルール違反は大人の世界では許されん」「申し訳ありません」「俺は内弟子は取らない。他人が俺の生活に関わってくるのが嫌だから」といわれて、親父の要ったことが飲み込めた。とにかく、新聞配達所に住み込んで通い弟子になった。

談志師匠も、中一で五代目柳家小さんに弟子入りしている。私と同年であるが、さすがに根性が違うから、ピンのピンぐらいのオチコボレになっている。談志の教えは「修業とは矛盾に耐えることだ」である。特上のオチコボレになるには、これぐらいの修業がいるということだろう。

【私のオチコボレ人生のスタート】

「青春は明るく、希望に満ちている」などという人がいる。おそらくよほどのお金持ちか能天気な野郎のことだと思っていた。最も、最近の御時世では、「全国民はお金持ちであるべきだ」ということになっているので、「青春は明るいのだ」という決議がされているのかも知れない。55年ぐらい前の農村は、貧しく暗かった。この先、どうしてメシを食っていったらいいのか、全く希望はなかった。実は中三の時、養成工という制度があるから受けてみよといわれて受けた。「成績はいいのですが、目が悪いので」といって断られた。私は、片眼の視力が0.02なので、球技に弱い。蛇足を付け加える。我ながら、距離感覚は「片目でどうして見ているのだろう」と思っていたが、後年アメリカに行った時、ディズニールランドでメガネをかける立体映画を見た。「どうせボクには

見えない」と思ったが、一応仲間と一緒にいった。「汽車が近づいてくる。見えるんだ」とビックリした。我が0.02君も、健気に働いていた。私は何度もメガネを外したりかけたりした。弱いながら働きに参加してくれているのを確かめ、わが右目君に感動した。

高校一年になった五月に、友人に「アカハタ」が復刊されていると聞き、一緒に駅の近くまで買いに行った。それが“新綱領”といわれるものが、全一面に載せられた新聞だったように思う。

一方、当時の農村の娯楽は、小学校の校庭か講堂に、幕を張って映す映画が一番だった。高一から高二の頃（1955～6）だったか、もう私はそんな映画には行かないようになっていたが、近所の子が「行きたい」といって私の家の前を駆けかけると、親が追いかけて泣き叫ぶ子供を捕まえ、引き留めていた。道路の際の部屋にいた私は、耳だけで聞いて、様子を眼に思い浮かべ煩悶していた。10円か20円の入場料がないのだ。今でも思い出すと、その時の気配を、まざまざと感じてしまう。

こんな状況の中で、何とかなる道はないかと思っただけで左翼に走った。父親のいうことを無視して、高校を卒業すると同時（3月1日）に、鉾山の社宅を廻るオルグとして山へ入った。これが、世間の正しいコースをたどるレギュラーへの道から外れる一歩となった。8月の下旬だったか、上部の人が来て「今までの方針は6全協で廃止になった。もうどこへ行ってもよい」と告げた。行く当てのない私は、勘当された親父の元へ帰るしかなかった。

こんな程度のいきさつを重ねた私が、談志や談春のようなピンのオチコボレになれるはずはない。しかし、オチコボレのコースへ行かざるを得ないという意味で、十分な経験であったと思う。その後は田舎で力仕事をした。特に山の木出しをしたときには、毎日血糊で肩にシャツが張り付いて、剥がすのが痛かった。この仕事をさせてくれたのが、近所の八才年上の兄貴分の哲ちゃん、大変世話になったし、農村問題でもよく話し合った。数年後も、吹雪の中のスキー小屋で、朝まで二人でウイスキーを1～2本飲んだりしていた。

今から考えても、このころは人に恵まれていた。従兄から「一応大学に行って卒業した方がよくはないか」という、助言をもらったりもした。オチコボレながら、自分なりのコースづくりができたのは、人運がよかったということにつきるように

<戦時総動員・オチコボレ並みの総レギュラー化時代>

本来レギュラーになると、地位と生活の保証を受けるものであるが、太平洋戦争末期になると、全国民が国家の統制下に入れられた。最低生活保障の配給も受けられない、オチコボレより酷い待遇のレギュラーになった。最近、「正社員」という言葉が受けているようだが、戦時中は百姓も、工員も、事務員もみんな「正」戦時下国民だった。私も「正国民学校三年生」で終戦をむかえた。悲惨な総レギュラー時代だった。(図6)

「正社員という呼称を信じるのもどうかしている。いずれ述べるが、オチコボレ会社の正社員は、全員オチコボレなのだ。おっとりしては食えない。全員自立心を持って力を合わせ、食っていかなければならない。オチコボレ会社は権力的ではないので、なかなか居心地がいい。ところが、オチコボレ国の正国民は悲惨だった。国の力が無くなるほど、国民の取り分をかすめ取り、いじめるので、この時代は酷い目にあった。

<敗戦による全員クビ・オチコボレから高度成長へ>

戦後数年たって経済成長が始まり、「所得倍増」時代に入った。それ以後、民間企業も給与や待遇の保証をして、レギュラー社員化を図った。新しいレギュラー制度として、健康保険や厚生年金保険、雇用保険なども整えられた。高度成長の結果、日本の円が1ドル=360円から100円ぐらいにまで上昇し、国民の大半が中流意識を持った。海外旅行など想像も出来なかった日本人が、買い物ツアーでパリなどに押し寄せ、蟹蹠(ひんしゆく)を買うぐらいになった。

これは日本の開闢以来の、ほんの瞬時に訪れた、日本人にとっての“宴のひととき”であった。そして、最後の悪あがきともいうべき、バブル経済に突入しはじけた。ここで本来なら、オチコボレの急速な増加となるどころであったが、①国民の預金金利の銀行による詐取(福井日銀副総裁の参議院による答弁では、2002年からの11年間で300兆円余)、②財政赤字によって次世代への付けまわし(約700兆円の赤字増加)で、10年余の期間オチコボレ増大を誤魔化した。(図7)

ここで、もう一度、時系列に整理してみる。

【近世、近代、現代への推移、レギュラーとオチコボレの増減】

<明治維新の開始から確立まで>

- ・1858 日米修好通商条約、露・英・仏・蘭とも

図5. 第一次大戦・レギュラー増大期(1910~1930)

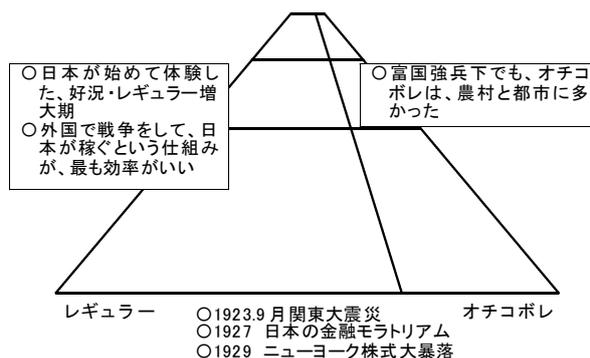


図6. 太平洋戦争、国民総動員→崩壊(1930~1945)

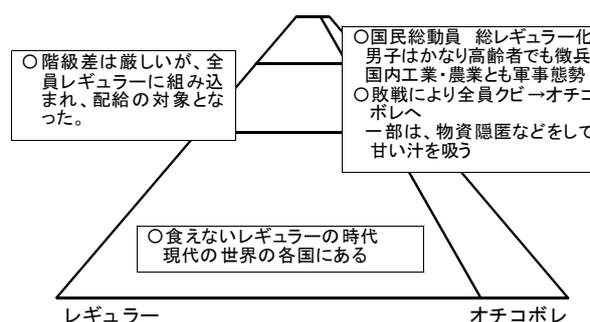
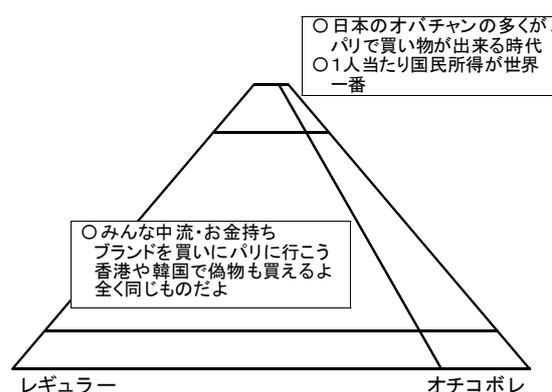


図7. 高度成長・国民総中流時代



- 締結→開国
- ・1867 日本の将来デザインとして“船中八策”を坂本龍馬が提起
 - ・1870 工部省
 - ・1872 学制を公布
 - ・1873 徴兵令公布、秩禄奉還、地租改正条例公布
 - ・1882 日本銀行設立
 - ・1885 日本銀行兌換券発行

明治維新という事業は、各国と外交関係を持たざるをえなくなってから、官制、学制、軍政を整え、日本銀行券の発行によって国家としての体をなすにいたり、明治維新が確立された。この間約30年にわたって国民は放置されてきたが、よく耐えて国民国家を設立した。

1885年は日本国の節目の年である。

図8. “今日楽・享楽主義者”大増殖、オチコボレ増大期、
下層オチコボレが増大(1990～)

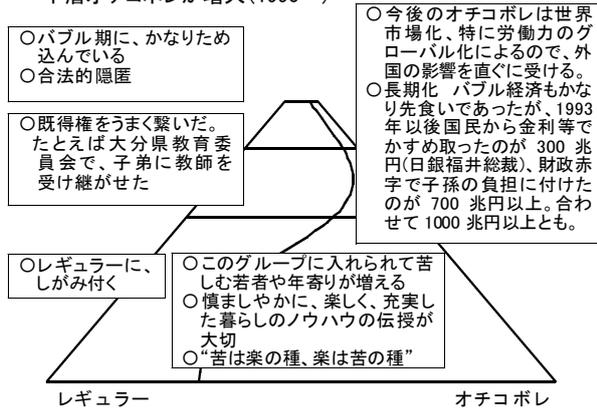
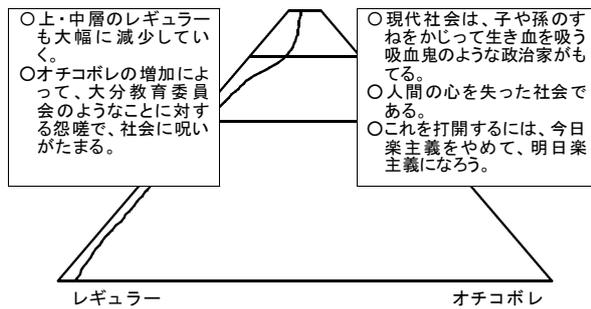


図9. 今後のレギュラー一定員の急減とオチコボレの急増(2010～)



その後上記のような推移があつて、60年後に(1945年)明治国家は崩壊し、国民はすべてクビとなった。この時も、明治維新と同じように外国の力に破れたのである。明治維新は、指導階級＝役人(武士)が、時代に対するリアリティーのある判断力を失い、外圧に翻弄された。幸いなことに、外圧同士の牽制の仕合と、オチコボレ下級武士の知力で植民地化されるという最悪の事態を免れた。

昭和の敗戦も、コピーによる前例踏襲型の知識に頼る役人(官僚+軍人)の、知恵のない無謀なリードでもたらされた。この時も外圧同士(アメリカとソ連)の牽制の合間で、何とか生き延びた。またも幸運なことに、東西冷戦の合間で経済成長を遂げることが出来た。

蛇足のようなだが、日本銀行兌換券が発行された60年後に、日本の円は崩壊し、ハイパーインフレを抑えるための「新円切り替え」となった。ところが新円の印刷が間に合わず、小さい切手のような証紙を配り、それをはったものは有効な紙幣とした。1946年2月のことだが、小学三年の私が親父に言われて証紙貼りをした。

【現在及び今後の、レギュラーとオチコボレ比率】

現在が、前の“日本人総オチコボレ時代”から60年後に当たる。還暦である。現代の日本人は、一寸ずる賢くなってきているので、人にツケを回しながら“享楽”を求める「今日楽主義者」にな

っている。昔の日本人は、「若い時の苦勞は買つてもせよ」とか「楽は苦の種、苦は楽の種」などといって働いたが、今日の我々は、楽をするために、子や孫にツケを回して誤魔化している。その所為で、60年還暦で陥るべき「日本国総オチコボレ」の時期を、先に延ばしたのである。(図8)

現代の若者の自暴自棄な行動も「明日楽主義」をとる大人がいないからではないか。明日のためより「今日楽」を取る人が多いからではないか。

若い人たちに言いたい。時代を切り開いてきたのは、オチコボレの革新力・突破力と、レギュラーの安定したサポート力であった。大人たちが前の世代から受け継いだレギュラー席で、胡座をかいている為に、オチコボレ席は不当に増加のスピードが速くなっている。しかし、このオチコボレ席の増加は、経済の世界が広がったからである。

1985年までは、日本人の賃金は国内で決まっていた。私が1983年に中国へ行った時には、中国から輸入などといったことはまずなかった。とにかく品質が悪かった。シルクやカシミアでも、とにかくデザインがなくなっていた。

我々が日常的に「世界」といっている地域の人口は、欧米と日本の数億人に過ぎなかった。1889年のベルリンの壁崩壊・ソ連圏の市場経済化で10億人になった。さらに今では、東南アジア・中国・インド・南米と、「世界」は40億人ぐらいに広がった。ところが、今ではユニクロの衣服を誰でも買っている。日本人の労働賃金は中国並みに成らざるをえない。我々はすでに、購買商品ではグローバル化を受け入れている。自分の労働力だけは高く買え、といつても無理な話だ。今後も、単純労働は40億人並みにならざるをえない。

九州は日本の自動車産業の中心になると言われ、「モノづくり日本」の代表的な地域だと言われてきた。しかし、考えてみるとモノづくり産業は40億世界の労働者と競争することだ。

そうではなく、九州の立地条件、人々の能力、気心を活かした商売に変えて、40億世界の中の2億人ぐらゐの人のニーズに対応すべきではないだろうか。それは、①自然の美しさ、②犯罪の少ない安全さ、③医療水準の高さ、④気心を活かした観光や福祉事業だろうと思う。

再度、若い人たちに言いたい。もしレールを外れてオチコボレになったら、レギュラーをうらやむのでなく、楽しい自分の人生を切り開いてほしい。(糸乗 貞喜)

※次回の内容

<オチコボレを自覚し、それで生きるぞと観念した出来事1~4>

<人と同じ仕事はしない、レギュラーと競争したら負けるに決まっている>

<競争は、勝つ方法を考えてからやる>など

■糸島に移り住んで、5年になりました

昨年は、子育てや地域づくりに関わる地元のNP0のメンバーにもなったことから、今まで以上に地元のネットワークが広がりました。特に、地域づくりに熱心な女性の方々と仲良くなったことは、とても財産になっています。

主婦の目線はシビアで、自分が普段意識していないようなところにも目配りしていたりとマーケティングを考える上で、とても参考になりました。

二丈町で取り組んでいる「糸島まるごと農学校」でも、女性の参加者が多く、講座の合間合間にいろいろと意見をいただきます。農業や食のことができるだけ掘り下げて、わかりやすく伝えることはなかなか難しく、ときには「わからない」といわれたりもしますが、生産者と消費者のよきつなぎ手となれるよう、日々勉強中です（この活動については、一段落したらまた報告したいと思います）。

地域づくりは、10年ぐらい関わらないと具体的な姿は見えてこないのではないかと個人的に思っています。5年住んでみて、ようやく地域の状況が見えてきたような気がします。今年は、自分の活動を再確認して、次の5年間に取り組んでいきたいと思えます。（本田 正明）

■笑顔と+αの一言

年末あたたかい人柄に多く触れあう機会がありました。12月中旬に行われた京築フェアという物産販売で、開催場所まで遠いなか、菜種油の組合の方がその良さをわかっていただくために自身が販売するコロッケなどの準備の他、屋外で寒いからと皆で食べる豚汁を用意してきてくださり、スタッフに声をかけては食べさせてくれる笑顔の素敵なお方。皆さんも販売やそれぞれ担当の仕事で大変なのに、慣れないアナウンスという役をもらった私に「大丈夫ですよ」と声をかけてくださった方。これを着たらハッピーになるよと法被を渡してくださった県の方。

通りから一本奥に入った店でどしゃぶりの中伺った私にまずタオルを渡してくれ、帰りは大荷物の私を見てタクシーを呼びに行ってくださいました方や「気をつけてお越しくださいね」と一言加えて

くださったある宿の方。脈絡もなくあげましたが、そんなことを立て続けに経験し、店の営業だろうとそうでなかろうと笑顔とプラスαの一言がこんなにもじんわりしみいるのかと実感した年の瀬でした。皆さんからあたたかいものをもらった今年は、私がそんな人になれるよう意識していきたいと思っています。（愛甲 美帆）

■気になる王監督の一言

昨シーズンで福岡ソフトバンクフォークスの監督を退任された王貞治監督がテレビで言っていた。「努力した人全員が、良い結果を掴むわけではない、しかし、やった人には、いい結果がでるチャンスがある…」。「努力すれば、必ず報われる」は、言葉としては美しい。ただ、実社会や勝負の世界ではそんなに甘くない。「努力した人全員が、良い結果を掴むわけではない、しかし「やった人には、いい結果がでるチャンスがある」には妙に説得力を感じた。

努力したものにはいい結果がでるチャンス、飛び羽ばたく挑戦権があるだけで、それを掴むのは、また別の問題。裏を返せば「努力しない人には、いい結果がでるチャンスもない」というふうなメッセージが込められている。私自信、世界の王さんの長い経験から掴んだフレーズとして大切に、一度しかないこの一年を大切に過ごしたい。

これは「人」を「まち」に変えて読み替えできる。地域づくりも汗かかずしていい結果だけは生まれない。汗かいたからといって、いい結果がでるとは限らない。ただ、一人ひとりが努力していかなければ、チャンスも来ないし、流れも呼び込めない。今年もいろんな形で地域づくりのお手伝いをしたいと思う。（雪丸 久徳）

■ベロタクシーで博多情緒めぐり

10月中旬のある日、ベロタクシー福岡の榎崎さんのお誘いで、ベロタクシーを運転してきました。ベロタクシーに乗るのは、平成19年夏の「サンセットライブ」以来、1年ぶりです。

今回参加したのは、福博まちめぐり協議会主催の「博多情緒めぐり」という、博多の街中や寺社を歩いて見て回るまちあるきイベントです。今年が3回目になり、今年からベロタクシーでこれまでより少し広範囲を回遊してまわるコースを追加したそうです。

コースの名は「ベロタクシーに乗って走る博多



櫛田神社とペロタクシー



博多情緒めぐりはボランティアガイドの解説付きです



5台のペロタクシーが連なって走ります

海物語コース」。櫛田神社→住吉神社→東長寺→ベイサイド→明治通り周辺の菓子屋といったスポットを回ります。所要時間は一周2時間半を要するのですが、それを一日二回走ります。日頃怠けている僕にとっては結構大変でした。しかもこれまで柳川市・志摩町と、交通量の少ない地方都市を走ったことはあるのですが、都心を走るのは初めてです。さらに自転車に乗ること自体、数ヶ月ぶりです。一抹の不安はありながらも「ペロタクシーに付いている電動アシストを使えば何とかかな」などと考えていました。

当日朝9時に現場に集合すると、なんと電動ア

シストがついてないではありませんか！ドライバーの皆さんは日頃鍛錬しているから必要ないのかもしれませんが、僕はほぼ素人です。基本は楽天的な僕でも、これにはショックを受けてしまいました。

もう一日中予約で一杯になってしまっているの、後には引けません。5台が一列になって走っているのですが、先頭を走るベテランドライバーに「手加減してください」と泣き言を言ってから出発しました。コースの最後の方は、徒歩の方が早いぐらいのスピードになりながら、本当に限界間際です。走り終わると汗だくでした。皆さん手加減してくれたのか、何とかついて行くことができました。

終わってみれば予想通りの筋肉痛でしたが、イベントの事務局曰く「ドライバーの皆さんの対応も、コース設定も最高でした。」と言われたそうです。それを聞くと多少疲れも吹っ飛びました。

ペロタクシー福岡は、昨年冬に唐人町商店街の空き店舗内にステーションを設置し、天神周辺から福岡ドーム周辺まで活動範囲を拡大しているそうです。利用する客層は、観光客よりも地元の方々が多く、子どもの塾への送り迎えや、高齢者の買い物など日常的な交通手段として活躍しているそうです。

ペロタクシーは現在国内20数都市で運行されています。全国的に見れば、観光交通の一つの手段としての使い方が多い中、地域のイベントや暮らしの一部として親しまれ、地域密着の活動を続ける福岡のペロタクシーは、全国のモデル的な存在になるのではないかと感じています。今回、久々に活動に参加できて嬉しかったのですが、次回は事前にもう少し準備してから参加しようと思います。

(原 啓介)

■まさかまさかの

私が応援しているソフトバンクホークスは'08年まさかの最下位に終わりました。

Bクラス(4位~6位)もあるかとも思いつつも、さすがに最下位はないだろうと思っていました。

開幕5連勝に始まり交流戦優勝ときて、終わってみたら最下位。試合内容を思い出したら「キーン」となりますが、逆劇的すぎて何だかスッキリしています。

でも、強がりじゃありませんが、4・5位で終わるなら最下位で良かった気もしています。首脳陣が交代した方がいいと思っていたからです。

実際入れ替えが行われたので、'09年は変わっ

てくれるはずと期待して、懲りずに応援したいと
 思います。(佐伯 明日香)



『われら雑草家族』
 著者 重松博昭
 石風社

11月半ば、我が家に、この本が送られてきた。重松氏との出会いは、約20年前に遡る。私の高校時代の友人が、重松氏の奥さんと大学時代の友人ということで「山田市（現在嘉麻市）に帰ったとき、一度、会ってみては？」との誘いにのり、重松さんのお宅におじゃました。この本の中にも出てくる当時の重松家の家は、基礎無しの柱、壁は板塀、屋根はトタン葺き、土間は土のまま中央にダルマストーブが鎮座し、まさに開墾村の掘っ立て小屋といったものであり、今でも鮮明に家の映像が浮かんでくる。10年前ごろにも一度お邪魔したときには、土間でどぶろくをご馳走になった。

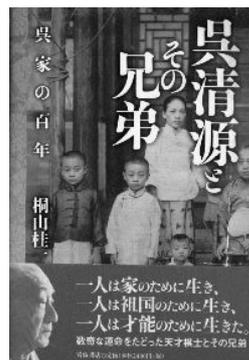
重松氏は大学中退後、結婚してまもない奥さんを引き連れ、山田市の栗林に移り住み、本人いわく「シロウト農法」、とくに卵生産と販売で現金収入を得ながら、たくましく1女、2男を育てられた。このシロウト農法、養鶏の苦労話については、10年前に出された本「山羊と暮らした」に書かれている。今回の2作目の本は、これまでの重松氏が書かれてきた文章を家族に焦点をあて、まとめられたものであるが、安全な農産品を提供するため、生産者と消費者を結びつける団体である「農創会」の活動と解散の記録、あるいはリゾートブームの時に山田市のゴルフ場誘致問題を契機として、有志とともに「山田市民塾」を立ち上げ、定期的に講師（中谷健太郎氏、宇井純氏、光野有次など）を招き、山田市の環境問題、活性化問題を真摯に市民とともに学ぶ場を設け、議論してきたことなどが記されている。結果はバブルが弾け、開発業者が手を引いてあっけない幕切れとなった。

家族の話では、クリスマスの日奥さんの手づくりケーキを4等分するのを子供たちが食い入るように見ている様子が描かれている。このケーキの話は、昭和30年代はじめの私の小さいころの

体験と重なり、懐かしく思う。我が家では、姉が買って来たケーキを9等分にして親、兄弟関係なく「あみだくじ」で決め、イチゴが載っている部分を取り上げた兄、妹を恨めしく見ていたことが思い出される。また、子供さんがお店でガムを万引きしたときには、車で帰るときに人のいない場所で平手で一発殴り、大声で「たった百円のガムで自分を売る気か」と話したことも忌憚なく記されている。このようにご自身の農業や卵生産の取り組みのなかで、子供への真摯な愛情が感じられる場面が多々でてくる。私のことを振り返ると、忙しさにかまけて重松氏ほど子供と真剣に向き合ってきたのかと、この本を読んでいて痛切に反省させられる。さらに重松氏は、最近の世界的食料危機のなかで、貴重な穀物を「バイオ燃料」や「投機によるマネーゲーム」に憤りを感じられている。また、これから安全、安心な食べ物の購入に対しては、消費者も賢くならないといけないことを示唆しておられる。

この本は重松氏のアウトローの生き様と子供さんたちの成長の記録でもある。読み終わると、重松家は、決して金銭的に豊かではないが、自然との触れあい、新鮮な食べ物、家族間の絆など、精神的には充分すぎるほど豊かであると感じる。「よかネット」を送付していたためか、時折、重松氏が雑誌等に書かれていたものを送られてきていたのであるが、返事しないままになっていたが、この書評で少し肩の荷が降りた気がする。

(山田 龍雄)



『呉清源とその兄弟』

著者 桐山桂一
 岩波書店

久しぶりに、私にとっては分厚い本を読んだ。といっても普通の単行本などのサイズの、B5判333ページである。この本は二つことを考えながら読んだ。

①日中戦争の中で、対立する台湾・中国・日本に分かれて生きた三兄弟

まず本の内容についてだが、中味は充実してい

て、なかなか面白かった。もともと囲碁は好きで、一週間の最重要時間が日曜の囲碁番組の時間になっている。しかし、アマチュアの3～4段ぐらいで、天才・呉清源の碁が分かるはずもないが、何度か並べたこともあるし雑誌や本で読んだこともある。その中で「囲碁は中庸を求める」という考え方に興味を持っていた。これは呉清源の哲学・世界観・囲碁観であることが確かめられて楽しかった。

呉清源は、三兄弟・三姉妹の三男で、14歳の時に囲碁の天才少年として来日した。長兄は日本に留学したのち満州国の役人となり、その後台湾、アメリカで暮らした。次兄は文学を志した人で、中国の大学を出たあと中国のインテリとして働き、後に共産党に入る。

この三兄弟の数奇な運命を描くため、桐山さんは呉清源とあしかけ五年に及ぶインタビューを重ね、次兄の呉炎とインタビューをするために何度も中国へ行き、長兄呉浣の子息と会うためにアメリカを訪れている。豊富な取材で積み重ねられた、呉家百年の歴史。日中友好という使命を負って日本に来ながら、日中戦争が始まって、祖国と敵対する日本で囲碁の修行を続けた呉清源。その日本とたたかう抗日戦争に加わった次兄呉炎。

日中戦争の中でも、中国は蒋介石軍と共産党の軍隊が内戦を繰り返していた。呉炎はその中で、高樹勲將軍の軍隊（蒋介石軍に属していたが、一面自立した軍閥でもある）を共産党軍との内戦から、共産党と協力する抗日戦争へ転換させることに成功する。そして、「民主建國軍」として中国共産党と連携する中で重要な役割を果たす。その後、共産党に疑われたりして苦難に遭うが、共産党に入るのである。その後も、文化大革命などに巻き込まれて苦労を重ねる。この辺りは、改めて日中現代史の複雑さを感じる。

気にしながら読んでいて、一つだけ未消化で残ったことがある。呉炎がエドガー・スノー「中国の赤い星」を読んで、毛沢東にあこがれる話が出てくる。実は私もこの本の翻訳が出ると直ぐに読んだがOverChainaという文字を見て、「中国を覆っていくということをスノーが言っているのかな」と思うぐらい毛沢東を尊敬していた。しかし1970年頃だったか、スノーが中国の主席となった毛沢東に会って、個人崇拝について尋ねた時、「彼らは崇拝しがっているのだから、させてやらねばならん」というような意味の回答をしてい

た。この時、違和感を感じて毛沢東嫌いになっていった。呉炎は文化大革命にも遭遇している。現在彼は個人崇拝についてどう思っているのかが気になったのである。

②目次と中見出しの、応援団が欲しい読者たち？

この本は2005年に刊行されている。面白いのに何故今まで読まなかったのだ、といわれるかも知れない。特に、著者の桐山さんは、NIRAの「個族化社会のネットワーク形成」の調査で協力してもらった人である。その言い訳を述べておきたい。

本が出た直ぐに書店で手にとってみて、面白そうだと思ったが買わなかった。理由の一つは2520円と少し高かったこともあるが、もっと大きい理由は333ページとかなりな大きさの本であるにもかかわらず、4章構成の項目以外、中味出しが一切ないことである。そして、やたら余白と行間の広い本になれてしまっている私は（日本人は、と他人の分まで言うまい）、この頃一層、新書版程度の本にならされてしまっている。

最近の新書版は、やたらと細かく「目次」が分けられており、文中にも「中味出し」が、マラソンの沿道応援団よろしく出迎え、送ってくれる。新書版ぐらいだと、その出迎えと見送りを気にしているうちの何とかゴールへたどり着ける。最近の出版物はたいがいそんな傾向である。

この本は、三兄弟の人生を同時におっていく仕組みになっているので、文中の見出しは付けにくいのかも知れない。勝手な言い分ではあるが、もし「文庫」にでもなるなら、その時は「呼び込み」と「看板＝目次」と「応援＝中見出し」をたくさん配置して頂くと、薦めやすくなるように思っている。（糸乗 貞喜）

よかネット No. 91 2008. 7

(編集・発行)

株式会社よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号
福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

<http://www.yokanet.com>

mail:info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

株式会社地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6942-5732

東京事務所 TEL 042-501-2531

名古屋事務所 TEL 052-202-1411

株式会社地域計画・名古屋